

宮城県立こども病院での写真展開催（2012 年 2 月 12 日～ 26 日）

写真展「ハッピーバースデイ 3.11～あの日、被災地で生まれた 11 人の子どもたちと家族の物語～」が、2 月 12 日より 26 日まで宮城県立こども病院内で開催されました。ようやく実現にまで漕ぎつけました。多くの方に強い印象を残したようです。

下の写真のお母さんとお子さんは、3 月 11 日に当院で生まれた方でもうすぐ 1 歳です。電気が来ない寒くて暗い病室で、頻繁に起こる余震を心配しながら帝王切開後の日々を過ごしました。赤ちゃんは地震 1 週間後まで手術を待ちましたが、今はすっかり元気に育っています。

震災の日に産声 11人

希望の子
輝く笑顔

東日本大震災が起きた日に生まれた赤ちゃんを撮影した写真展「ハッピーバースデイ3・11」が10日、仙台市の宮城県立こども病院で始まった。多くの命が失われた当日に誕生した子どもたちのあどけない笑顔が印象的だ。

仙台の病院で写真展

東京在住のフリーカメラマン小林紀晴さん(44)が「改めて命の尊さを考えるきっかけになれば」と、宮城、福島、青森県の赤ちゃん11人が母親に抱かれて笑う様子などを撮影し、34点を展示した。病院の駐車場に車を倒して生まれた子、揺れに襲われる分娩室で助産師が覆いかぶさって守られた子など、赤ちゃんたちはいずれも壮絶な状況で産声を上げた。

瀬川虎くんは11日午後3時23分、仙台市内の民間病院で生まれた。母の史佳さん(39)が分娩室の隣で待機

していたところ、地震が発生。雪の中、いったん外に避難したが、陣痛が収まらず、停電で真っ暗になった受付奥の簡易ベッドで、懐中電灯の明かりだけを頼りに出産した。ペンや紙がなく、その場に居合わせた全員で生まれた時刻を覚えた。

絶え間ない余震が続く中の産声。ロビーに避難していた人たちが拍手が起きた。父の誠さん(37)は、大した病気もなく順調に育ってくれた。妻と『こうして3人で生きていることが何より幸せだね』といつも話している」と話す。

木下京子さん(31)(仙台市の長女瑞萌ちゃんは11日昼、こども病院で生まれた。先天性の腸の病気があり、すぐに手術が必要だったが、検査中に地震が発生。手術は延期され、震災後1週間を新生児集中治療室(NICU)で過ごした。その後、5時間にわたる手術は成功し、今はすっかり元気になった。父の要さん(32)は土日に必ず風呂に



自分の写真を見る木下瑞萌ちゃんと母親の京子さん(9日、県立こども病院で)＝飯島啓太撮影

一緒に入るといふ。9日に展示された写真を見に来た京子さんは「大きくなったら生まれた日のことを伝えて、命の大切さを教えたい」と話した。写真展は26日まで。その後、3月1日から30日まで、東京都港区のユニセフハウスで催される。入場無料。

2月10日付け読売新聞全国版夕刊で、当院で開かれている「ハッピーバースデイ 3.11」写真展を紹介していただきました。



抱っこされている瑞季ちゃんは来月誕生日を迎えます．5 か月のときの写真である右のパネルと比べるともう赤ちゃんではありませんね．

ご意見，ご感想などがありましたら，ぜひメールでお寄せ下さい
アドレスは murosuki に yahoo.co.jp をつけたものです

東日本大震災後のわれわれの活動記録 にもどる

フロントページにもどる

カウンタ 15 （2013 年 3 月 12 日より）